

みちのく 電記

東北から世界へ、
ぼくらの未来をかけた
電気をめぐる“旅”



監督・製作・撮影・編集
岩崎祐

共同製作・追加撮影
ロジャー・スミス

製作協力
マイティー・アース

2024年 83分 日本 16:9 カラー ドキュメンタリー
©2024 一粒舎

あきらめない。

気候変動の取り組みは、貧困の取り組み。
みんなと一緒に、
持続可能な地域社会をつくっていける。

宮城の発電所めぐり × 原発事故の経験 グローバルサウスとのつながり × 仙台のエネルギー貧困対策

本作は、仙台を拠点に気候変動対策に取り組んできた若者、鳴原（しぎはら）宏一朗の活動の軌跡を伝える。小学生の時に福島・郡山で原発事故の影響を受けた彼は、仙台の大学に進学後、被災者への補償が打ち切られていく現実に疑問を抱き、エネルギーや貧困問題への関心を深めていった。やがて世界の若者たちの間に広がった気候運動に共鳴し、街頭で授業ストライキを始める。原発事故後、宮城県内では気候変動に拍車をかける石炭火力やパーム油発電、性急なメガソーラーなどの建設が相次いだ。鳴原は現場で研究者や住民の声に耳を傾ける中で、市民出資による地産地消のソーラー発電に希望を見出していく。

バングラデシュの同世代からのメッセージで、日本が海外で進める石炭火力事業の実態を知った鳴原は、国境を越えた運動に加わり、エジプトで開かれた国連気候変動対策会議 COP27 を訪れる。一方、日本国内では電気代が高騰し、鳴原は仙台の仲間と共にエネルギー貧困対策としての再生可能エネルギーへの転換を訴え、食料支援にも取り組む。日本の周縁としての「みちのく」と、多くの日本人にとって馴染みの薄いグローバルサウスという「未知の国」をめぐる鳴原の活動は、気候危機という地球規模の課題と、身近な生活の中にある切実な問題を結びつけていく。カメラは、一人の若者の成長と、彼と仲間たちが生み出す社会変化の兆しを映し出す。

みちのく
電記

監督・製作・撮影・編集：岩崎祐 共同製作・追加撮影：ロジャー・スミス
出演：鳴原宏一朗
2024 年 / ドキュメンタリー / 83 分 / 16:9 / カラー ©2024 一粒舎

michinokudenki.com



自主上映会 開催 & 募集中

お問合せ：『みちのく電記』上映会実行委員会
michinokudenki@gmail.com